

【資料】

平成27年度 林業研究・技術開発推進近畿・中国ブロック会議育種分科会

林 勝洋^{*1}

平成27年度林業研究・技術開発推進近畿・中国ブロック会議育種分科会は、10月7日に近畿中国森林管理局において、林野庁、近畿中国森林管理局、関西育種基本区内の各府県及び関係機関から58名が出席して開催された。

最近の林木育種の状況について

林野庁から、①林木育種に関する情報提供で、「マツノザイセンチュウ抵抗性品種開発技術高度化事業（継続）」、「苗木安定供給推進事業（拡充）」及び「次世代林業基盤づくり交付金」、②特定母樹の増殖および花粉発生源対策については、「特定母樹の指定と基本方針の策定状況について」、「特定母樹応募要領」及び「花粉発生源対策の推進」、また、林木育種センターからは、「特定母樹の普及及び新品種の開発について」及び「成果集について」の説明があった。

林木育種の推進について

(1) 林木の新品種の開発

関西育種場から以下の説明を行った。

- ① 第2世代スギ・ヒノキの選抜について、四国北部及び四国南部育種区で、平成26年度までにスギエリートツリーが76系統、ヒノキエリートツリーは52系統が認定され、特定母樹では、平成26年度までにスギ26系統、ヒノキ14系統が指定された。また、近畿、瀬戸内海、日本海岸西部育種区では、平成27年3月にヒノキエリートツリー35系統が認定された。また、第3世代選抜のための育種集団の造成では、スギエリートツリー等による人工交配を進めており、スギエリートツリーの性能評価試験を兼ねた育種集団林を平成25年度に2ヶ所、平成26年度に2ヶ所を設定し、四国森林管理局と共同で初期成長の調査を実行中である。
- ② マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発については、石川県及び島根県で選抜されたクロマツ候補木の二次

検定を実施し、平成26年度は計3系統が選抜基準を満たし合格した。この追加により、平成26年度までにアカマツ98品種、クロマツ48品種を開発した。今後は山行き苗木の抵抗性を高めるため、抵抗性マツの現地での性能評価や、より抵抗性の高い第2世代品種の開発を関係府県と連携して進める。

③ 花粉症対策に有効な品種の開発については、花粉の少ないスギを平成25年度に徳島県産の精英樹の中から2品種を開発し、計29品種となった。また、花粉の少ないヒノキについては、平成19年度に22品種を開発した。無花粉スギの開発では、林木育種センターで開発した無花粉スギ「爽春」及び「三重不稔（関西）1号」と成長や材質等の優れたスギ精英樹等との人工交配を進めている。

④ 幹重量（二酸化炭素吸収・固定能力）の大きい品種の開発については、次代検定林等で調査したデータを解析し、平成26年度までにスギは計25品種、ヒノキでは計12品種を開発した。

⑤ 初期成長に優れたスギ品種の開発については、エリートツリーの山行き苗の生産に今しばらくの期間を要することから、第1世代精英樹の中の初期成長に優れた特性等の情報を活用し、品種開発を進める。

(2) 育種種苗の生産と普及

育種種苗の生産と普及の状況及び林木遺伝資源の収集・保存について、実績と計画の説明を行った。関西育種基本区における平成25年度の育種種苗の使用率は、スギは74%、ヒノキは99%となっている。

林木育種事業の取り組みについて

平成27年度は、各府県ともにほぼ前年並みの事業・研究の取り組みが計画されており、引き続きエリートツリー等の成長の早い品種のミニチュア採種園の造成及び造成準備が複数の県で進められる。

* E-mail: hayashik@affrc.go.jp

¹はやしかつひろ 森林総合研究所林木育種センター関西育種場

協議事項及び提案・要望について

協議事項では、次期推進計画における林木育種の推進方向（スギ・ヒノキ精英樹の次世代化の推進、マツノザイセンチュウ抵抗性育種の推進、花粉発生源対策に資する育種の推進及び、皆伐再造林が進められる中での新たなニーズや造林樹種等）について、今後の課

題と対策の意見交換を行った。また、提案・要望では、①採種園の母樹となる苗木を十分供給するための効率的な苗木の育成方法の開発、②少花粉スギ・ヒノキ及びエリートツリーの着果特性、種子重量、発芽特性並びに採種園管理法の公表について、要望が出された。